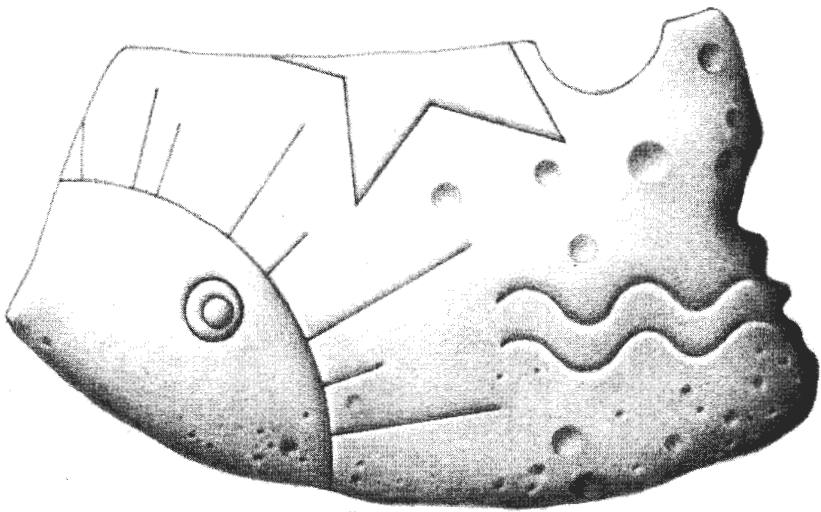


徳永直の会会報

第 60 号



小林孝夫 画

2012年7月

目次

会報六十号にあたって

会長 高木陽助

徳永直と『太陽のない街』……………エヴリン・ルシーニョードリ	3
まず作品発掘から始めよう……………中村青史	6
徳永直の一九三三年以降……………木村一信	7
徳永直と植民地文学……………浦田義和	8
小説『冬枯れ』の登場人物について……………梶原定義	13
徳永文学を読みながら……………廣島正	14
徳永直の作品を読んで……………中村茉莉美	16
「太陽のない街」での出発から……………金野文彦	17
「日本人サトウ」へ……………永田満徳	18
捕物作家納言恭平とプロレタリア精神……………永田満徳	18
宮城・登米町 佐藤三千夫記念会メッセージ……………	19
文学散歩⑤……………	20
第三十五回 孟宗息……………	20
二〇一二年度 総会報告・等……………	22
編集後記……………	23

一九七八年四月、熊本・徳永直の会の会報第一号（創刊号）が発刊された。冒頭の「よびかけ」に「熊本が生んだプロレタリア作家、徳永直は日本近代文学に大きな足跡を残しました。代表作である『太陽のない街』をはじめ、生い立ちと故郷の熊本を描いた短編小説『馬』、『他人の中』などは、今なお人びとに感銘を与えつづけています」とある。

以来、「徳永文学の普及や研究・資料の収集などの活動とともに、熊本における民主的な文学・文化運動の発展をめざして」、毎年一・二回の会報を発刊してきた。そして、三十四年後の今年、第六〇号を発刊することとなった。

新聞報道によると、世界経済の低迷が日本も覆い、経済的に弱い層を直撃している。一月の完全失業率が四・六％、昨年十二月の生活保護受給者数は約二〇九万人。過去最多を更新し続けている、という。国会では遂に社会保障と税の一体改革の名の下に消費税増税が決議された。益々進行する少子高齢化社会。真面目に働いているのに、働こうと思っていないのに、日の当たらない人びとはまだまだゴマンといえるのだ。さらに、終わりのない原発問題も抱えている。

私たちは今一度、「徳永直の文学」の原点に立ち戻って、じっくりと味読したいと思う。



フランス語版『太陽のない街』の復刻版

徳永直と『太陽のない街』^{*1}

エヴリン・ルシーニユリオドリ

和 田 崇 (訳)

社会的に低い身分の出身で、労働者であり、ほとんど独学者であるという点で、徳永直はプロレタリア文学の中でも特別な存在となっている。そもそも、「プロレタリア文学」という言葉は、フランスではプロレタリア階級出身の作家による文学を指すのに対し、日本では厳密に第三インターナショナルに影響を受けた一九二〇年代のマルクス主義文学を示しているのである。プロレタリア文学の黄金時代は、勢力のある作家同盟を含むいくつかの同盟を再組織した全日本無産者芸術連盟（ナツプ）と日本プロレタリア文化連盟（コップ）という、日本共産党とつながった二つの連盟の形態のもとに構成された一九二八年と一九三四年の時期に位置づけられる。フランスにおけるシュルレアリストもそうであったように、この時期の日本のプロレタリア作家のほとんどが若い知識人であり、プロレタリア階級者ではなかった。彼らとは異なり、徳永直が実際に労働者作家であったことは、彼の名譽の一因となったと言えよう。

徳永直は一八九九年に九州の熊本で、たいへん身分の低い農民の家庭に生まれた。子供のころ、学校が終わると、家計を助けるために竹かごを作る。十代前半の時から、日本の文字の特異性のために肉体労働でありながら高い技術を要する植字工として、新聞社で働く。同時に、海軍兵学校に入学することを夢見て夜間学校の講義を受講していたが、健康不良のため一九一二年にそれを諦めなければならなかった。また、組合

活動を始めたのは一九一九年と一九二〇年の間であり、一九二〇年の熊本印刷労働組合の創設にも貢献する。

その後、地元の新聞社に勤めていたが、ストライキをしたことで解雇され、それが熊本における再就職を困難なものにした。そのため、一九二二年に上京し、博文館印刷所（一九二五年に共同印刷になる）で植字工の職に就き、印刷労働者の組合の創設に参加する。一九二四年、全従業員の高賃上げを達成したストライキにおいて、中心的な役割を果たす。一九二六年一月から三月にかけて、結局は失敗に終わる長いストライキに参加する。彼は他の一七〇〇人の労働者と同じく解雇になる。その活動が原因でブラックリストに載せられたため、何度も解雇され、絶えず仕事を変えなければならなかった。

それは小説を書き始めるのとはほぼ同時期のことであり、一九二五年から組合機関誌に小説を発表する。この作家としての活動が、時おり彼のアンガージュマン（政治参加）と両立できていないと感じたことがあったようである。書くことに費やした時間が彼を組合の責務から遠ざけ、ついには組合の委員会のメンバーに小説を書くのをやめると約束しさえしなければならなかった。ただし、共同印刷の大ストライキの経験は、彼をして作家に成らしめた小説の材料となるのであった。

『太陽のない街』は最初、雑誌『戦旗』（全日本無産者芸術連盟の雑誌）の一九二九年六月号から一一月号にかけて連載小説として発表された。初回掲載分は、当時既に作家としての才能を開花させていた小林多喜二の『蟹工船』連載第二回目と、作家同盟の中心的な理論家である蔵原惟人が翻訳したソヴィエトの作家アレクサンドル・セラフィモヴィチの『鉄の流れ』の間に挿入されて発表された。当時完全に無名だった徳永直の小説は、権威のある作家たちと並べられたことによって押しこまれ、無視される可能性もあった。ところが、『太陽のない街』は逆にすぐ反響を

*1 原題は *Evelyn Lesigne-Audoly TOKUNAGA SUNAO ET LE QUARTIER SANS SOLEIL*。本稿は、フランス語版『太陽のない街』の復刻本 (*LE QUARTIER SANS SOLEIL, EDITIONS YAGO 2011*) へ新たに付された解説の日本語訳である。

呼び、同盟の内外から称賛を受けた。この成功に続き、徳永はさらにいくつもの労働者の生活や闘争を描いた物語を発表した。

しかし、一九三一年以降、官憲の弾圧はますます顕著になっていった。プロレタリア文学の主な指導者たちは、刑務所へ頻繁に拘留された。さらに一九三三年二月、小林多喜二は拷問を受けて死んだ。その四ヵ月後に、当時投獄されていた佐野学と鍋山貞親という二人の共産党の重要人物は、彼らの政治活動を放棄することを公に宣言した。この二つの事件は、プロレタリア運動全体を揺さ振る衝撃波を生じ、転向の大きな波を引き起こした。そして一年も経たずに、運動は崩壊した。

転向が拷問によって引き出されたことがあるのは事実だが、転向者はむしろ家族に対して自責の念を感じたか、あるいはまた、あまりに原理主義的になった運動に対する本当の拒絶さえあつたように思われる。転向後の芸術家たちが歩んだ道もさまざまであり、一部は、別の形での道徳的潔白を探し求めて、あるいは社会の視線に対して名誉を取り戻すことを望んで、急転換して体制の熱心な支持者になった。一方、徳永直をはじめとする他の者たちは、ただ自分たちの信念を棚上げにしておき、戦後すぐにアンガージェ（政治参加）の文学の新たな形式の基礎を提起し、またその信念を復活させた。

徳永直は、蔵原惟人が命じた方針へ明確に反対する立場をとり、政治に対する文学の自立を主張した論文「創作方法上の新転換」を一九三三年九月に雑誌『中央公論』へ発表し、作家同盟を脱退した。一九三四年に、転向小説「冬枯れ」を発表。それから、一九三七年に、自ら『太陽のない街』の絶版を宣言した。徳永の態度は、確かに大量の離反者を出した時期に現れ、彼の家族を保護する必要のために課せられたものであったが、蔵原に反対する立場をとることを示したように、彼の中では政治的転向がより深い文学的な考えと一致していたようにも捉えられる。

戦中に、徳永直は、『はたらく一家』や『八年制』といった、身分の低い人々の生活を描いた物語をたくさん書いた。一九四六年から宮本百合子、中野重治や蔵原惟人といったプロレタリア文学の他の古参者たちとともに、戦後のアンガージェの文学の中心になる新日本文学会の設立に参加する。同年、彼は亡き妻の生涯を回想した長編小説『妻よねむれ』およびシベリアでバルチザンとなった若き共産主義者の生涯をたどった短編小説『日本人サトウ』を発表した。そして一九五八年、五十九歳のときに胃癌で亡くなった。

●

徳永直の『太陽のない街』は小林多喜二の『蟹工船』と並び、日本のプロレタリア文学の双璧とされている。フランス語版『蟹工船』の刊行の二年後に、今日この小説の翻訳を再版することで、ヤゴ出版社はフランス人にプロレタリア文学に関する理解の範囲を広げることを可能にするのだ。

『蟹工船』と『太陽のない街』は、一九二九年という同じ年に刊行、同じ雑誌に掲載され、すぐに反響を呼び、演劇でも同じく大きな成功をおさめており、いわばパラレルな運命にある。また、二人の作家の評判は、紹介記事、さらには翻訳によって、ロシアをはじめ、ドイツやフランスなど、海外にまでも広まった。翻訳版の中には、原作とほぼ同時期に出版されたものもあつたことを重視しなければならない。日本の文学があまりよく知られておらず、まだ翻訳も少ない時代に、国境の外側で、プロレタリア作品が伝わった速度は他にはない驚くべき現象である。さらにずっと後の一九五三年、日米安全保障条約への反発として、前衛映画の一部が政治的な体制批判の特権を与えられる場となった時に、これら

二つの小説は両方とも映画化された。

一九三〇年代当時、日本の外から見て、徳永と小林の二人の名は不可分であり、彼ら二人が日本のプロレタリア文学の全てを体現していた。しかし、徳永と小林それぞれの社会的な出自、作家同盟内部における姿勢、あるいはまた作風などは全く対照的である。

ジャン・ジャック・リュウ・ディン氏がパリで行われたフランス語版『蟹工船』出版記念講演で詳しく述べたように、プロレタリア文学の中心となったナツプやコップといった大きな連盟は、アナーキスト、社会主義者、そして共産主義の異端者たちを少しずつ排除して、原理主義的な方向を選んだ。そんな中、多くの作家にとっては組織が定める方向と自分の創作との間に矛盾があつたが、小林多喜二はそうではなく、逆に組織の根本原理に添って才能に溢れた作品を書いた。小林にとって組織は束縛ではなく、才能を形づけるものだったのである。また、小林は文学大衆化の方法、あるいは芸術に対する政治の優位性に関する議論にしばしば加わった。一方、徳永は議論に関心を抱かないと言ひ張り、何よりもまず自分が参加した労働組合の闘争の記録を書きたいと表明していた。その点において、彼の立場はナツプやコップといった大きな連盟の作家よりも、著しいイデオロギーや形式上の束縛なしで、自発的な物語を生み出してきた前世代の作家たちに近かつた。^{*2}

小林多喜二と徳永直は作風も異なっている。小林は、『蟹工船』において、『集団の主人公』を作品の中心に置いたために、個々の特徴をぼやかそうと努めたのに対し、『太陽のない街』において、徳永は、読者をストライキの対立の中心に置くために、逆に主人公の性格を詳細に表現しようと努めた。そうすることで彼は、資本家の権力、ブルジョア階級や仏教

聖職者の臆病さ、官憲の暴力や運動内部の対立などを具現したのである。

徳永は、労働者に階級闘争へ関心を抱かせるために、労働者たちが雑誌で読んでいる大衆文学から着想を得たと表明した。つまり、娯楽性を残したまま、虚構世界を現実世界にすり替えようとしたのである。そのため、この作品は『蟹工船』ほど前衛的な手法をとっておらず、やや古典的と思われるかもしれない。しかしながら、『太陽のない街』は演劇的な場面設定やリズムミカルな語り方が特長で、紛れもなく優れた作品である。芸術至上主義の支持者としてアンガージュエの文学へ根本的な抵抗を持った川端康成さえが、「表現の歯切れのいい平明さと、全体の明るい健康さと極めて自然に出て来る力強さと、材料の配置と筋の展開との新鮮さと、或る程度の感傷と衝撃」^{*3}と、この小説を絶賛したのも意味深い。

小林多喜二は命を失うほどアンガージュマンに対して厳しく忠実なままであり、徳永直は意見の対立の総括をしている間にプロレタリア作家の運動をやめたのであつて、同じプロレタリア文学の中で肩を並べた二人は、それぞれ対照的な道を貫いた。死さえもいとわぬ運動との完璧な一致か、あるいは進むべき方向性を探求するための組織からの離脱か。二人はプロレタリア文学の力強さとその限界を示してくれているのではないだろうか。

【付記】

翻訳に際し、著者のオドリ氏をはじめ、学友のナディア・マレー氏、陶萍氏にご協力を賜りました。諸氏に対し、深謝申し上げます。(訳者)

*2 Voir Jean-Jacques Tschudin, « Kobayashi Takijirô et la littérature prolétarienne », conférence du 30 janvier 2010 à la Maison de la Culture du Japon à Paris, non publié. <http://www.reseau-asie.com/article/societes-modernite/kobayashi-litterature-proletarienne-tschudin>. 参考照。

*3 川端による『太陽のない街』の批評は、雑誌『文藝春秋』の一九二九年八月号および一〇月号に二度発表された。

まず作品発掘から始めよう

中村 青史

徳永直の研究は、やはり熊本がやらなければ誰もやらないようだ。まず彼の作品の発掘から始める必要がある。埋もれている作品が、熊本関係の新聞・雑誌に沢山あるようである。『徳永直文学選集』Ⅱ収録の「洗馬橋附近」は、『肥後』という東京での出版だが、熊本県人会が出していた小範囲の雑誌掲載のものであった。「坪井川」ほか18編は『日本談義』掲載といった風に、そのほか地元紙にも発表した作品がある。

今回はその一例として、昭和五年五月十一日(日)の『九州日日新聞』掲載のエッセイを紹介したい。

「十年振に見る

モダン熊本風景」

徳永 直

閑散な上熊本

足掛十年振りに郷里の土を踏んだ。上熊本駅で降りると、迎へに来てゐてくれた弟達が「どうです熊本もモダンになったでせう」と云ふ。

成程電車があり、円タクがある。街の様子も趣を異にしてゐる。円タクに乗って振り返ると、構内の隅に三四台の人力車がある。資本主義文明に押しつぶされたクラシック風景だと思つた。

ホームにつゞく貨物倉庫に、荷馬車、トラツクの影がない、上熊本駅は「農業熊本」の景気不景気をはかるバロメーターだと聞いてゐる、全国的農村の疲弊は「モダン」熊本に暗い陰を投げてゐる。

「玄界灘」上、下通丁

「森の都」モダン熊本の外ぼうを新坂を下りながら見る、市外のない「人口十五万」の熊本は、熊襲のヒゲづらのやうに、林の中にある。

上通丁の傾斜を、円タクが徐行しはじめると、これから「モダン熊本」の中枢神経に入るわけだ。左右の軒並も、十年前に比べればまったく綺麗になつた。「カフエー水谷」がめつからなかつたが、無くなつたのかしら……。なつかしいものに、金書堂があり、長崎書店があつた、新刊を売る書店が新らしく三四軒殖えてゐるのも目につく。

円タクがひどく跳上る、気がつくくと人道車道の整然たるのはいゝが、中央道路はアスファルトでない。ヒヨイと思ひついたが震災前の東京、宮城堀端を、自動車運転手が「玄界灘」と名付けてゐたのを思ひ出した。この上通、下通丁はたしかに「玄界灘」以上だ。

グロテスクな「廿三聯隊跡」

市役所横を抜けて、熊本城の堀端を通る、いとも険阻な風ぼうを持つた熊本市役所は、上野の美術館みたいな感じがする。モ少し敏捷な形式に出来なかつたものだろうか。

廿三聯隊跡へ来ると、私はまったく他国に来たやうに見当がつかない。右手のアキ地に蛙の目玉のやうな三菱、千徳その他等々の広告塔が、いまにも足許から飛びつきさうだし、左手には築地本願寺の庫裡みたいな旭座を背景に、極彩色の凱旋門みたいな塔が突出つてゐるかと思へば、モダンなゴシックの石造建築もある。それにまったく撮影所のお正午休みのセットみたいにグロテスクだ。

粹でない「モダン新市街」

記念碑前で円タクを降りて十字路をブラつく。この邊は「大熊本」の心臓だ。少なくとも「モダン熊本」の中心だ。相撲館松竹館がなくなり、朝日館や産業何とか館といふのが新しく出来てゐる。上通町を神保町にするなら、こゝは銀座に浅草六区兼併といふ感じ；改築した電気館の大

きいのおどろく、弟が傍から「大きいでせう、日本一だと窪寺館主は云つてゐます」まさか、日本一でもあるまいが……それでもきほいこんでゐる弟の手前私はとにかく感心した。エレベーターがあるのも奇抜だが、貨物運送やうに頑丈なエレベーターや、文句を云つたらハリ飛ばしさうなボーイの面構へにもおどろいた。

そしてこの際プロレタリアとして抗弁しておくんだが、熊本の活動写真館はどれでも割引がないこと、入場料が浅草あたりに比して三四割も高いことだ、有閑階級の歌舞伎芝居やなんかならとにかく大衆相手の活動写真が、割引時間もなく、階級を三つにも分けるに至つては、モダン熊本の恥さらしだ。

それは恰も、断髪の熊本モダンガールがクラシックなブルジョア短歌などを、その頭腦の内容にしているのと同断、新居格を待たずとも、それは少なくとも、「粹でないモダン」なのだ。

依然たる生家

六畳二間の藁ぶきの小屋、これが私の生家だ。見よ小作人の生活は—熊本がモダンになつても、依然として、いや更に悪くなつてゐるのだ、金肥のみをつかふ郡部の貧農は尚更辛いであらう。私は疲れた身体をポロ置に横たへる、十幾年前をあへいで生活して来た両親のグチを聞きながら、蚤に喰うはれて眠らなければならぬ。

(前徳永直の会会長・元熊本大学教授)

徳永直の一九三三年以降

—「島原女」「女の産地」から—

木村 一信

徳永直は、一九三三年九月、「創作方法上の新転換」を発表(『中央公論』)するが、この文章は、この後の徳永作品を生み出すのに大きな役割を果たしたと言えよう。結論を一言で言えば、それは自らの経験からくるところの「体験主義」への傾斜を志向したことである。

その直接の契機としては、同年一月の母ソメの死去、二月の小林多喜二の特高による虐殺死などが考えられるが、取り締まりと弾圧によって、次第に追いつめられていくプロレタリア作家としての活動の苦しさは背後に強くあつただろう。

「創作方法上の新転換」と発表年月を同じくする短編小説「島原女」(『新潮』)は、この「体験主義」から言えば、見のがせない作品である。

津田孝の編になる徳永の「年譜」(『一つの歴史—徳永直遺稿集』所収、一九五八年刊)の記述を引くと、徳永は、一九二二年、二二歳の時に、「長崎県島原町に憲政会系の新聞社が新設され、活字、機械とともに雇われて、島原半島にわたる。社長たちボス連の有明湾埋立工事に関する悪事をバクロし、待遇改善、賃上げをスローガンとして二日間のストライキをおこなう。このため暴力団にとりかこまれて、暴力的に船にのせられて追出される」とある。「島原女」は、この折の体験や見聞がその素材となつているが、「社長たちボス連」への抗議については、その内容を変えて二年後の一九三五年九月、「女の産地」(『中央公論』)の中に点綴している。この作品の題材は、「島原女」と同じく、海外へ「密航婦」として売られていく「からゆきさん」のことである。

徳永は「有明湾埋立工事に關する悪事」を、同じく新聞社に勤めた友人たちと力をあわせて「バクロ」したが、島原の地に来て目のあたりにした「からゆきさん」の現実についても、批判的な目をもつたであろうことは、この二つの作品からよく読みとれる。

「島原女」は、すぐさま「文芸時評」（たとえば、『新潮』10月号、参照）で讃辞を寄せられ、また、少し間において中野重治がこの作品を高く評価するエッセイを書いている（『初夏雑感』、『早稲田大学新聞』、一九三五・六・二六）。

「女の産地」は、「島原女」が一人の女性を中心に描き出したのとは違って、町をあげて「娘子軍」を海外へと送っていくその土地の現実と人々の厳しい生活ぶりとを剔抉している。しかも、住民や当の「娘子軍」となる娘たちからは、主人公「鷲尾」らの「人道主義者」的言動は、迷惑がられるという複雑さも描出され、奥行きが増した作品となっている。

一九三三年、三五年と、徳永は、なぜ、島原を舞台にしたこのような作品を書いたのであるうか。二作品をよく読めば、共通して登場する用語のあることに気づかされる。すなわち、「世界の公園」ということばである。「島原女」では二回、「女の産地」では五回、この言葉が繰り返されて、注目すべきである。

我が国では、一九三一年九月に「国立公園法」が施行され、三四年三月、瀬戸内海国立公園、雲仙国立公園、霧島国立公園の三カ所が、日本で最初の国立公園としての指定を受けた。徳永が「島原女」を発表する半年前、雲仙や島原地区は、この「国立公園」指定を受けたことで大きく湧いていたのである。国立公園は、日本を代表する公園であると共に、世界の公園への仲間入りでもあるといった言説が、現在の「世界遺産」と同様に言いかわされていたと推測される。

そうした動きを新聞やさまざまな報道で目にした徳永にとって、一〇年余り前の若き日の苦い思い出が甦ってきたであろうことは想像に難くない。「島原女」のヒロイン「おしま」の「へん、なにが世界の公園だ、阿呆らしい」との科白がそれをよく表わしている。

自らの体験と、社会的な動きとの関連で作品を生み出す手法は、このあと「八年制」（『日本評論』一九三七・六）や日本の活字の誕生を延々と追いかけた『光をかかぐる人々』（一九四三年刊）などでも駆使される。

いま一つ、作品「島原女」の切り開いた可能性として、働く女性、あるいは不当な地位に置かれた女性の姿を描く作品群への第一歩となった点も見逃せないであろう。一九三三年以降の徳永作品は、いわゆる「転向」への苦しい道行きと評されるものの、一方ではいかにも徳永らしい、小説の名手としての「体験主義」に根ざした新しい道程が始まる「豊饒」の世界でもあるように思われる。

（立命館大学名誉教授・プール学院大学学長）

徳永直と植民地文学

浦田義和

徳永直と植民地との関わりについて、「満洲」については、二〇〇八年五月の徳永直没後五〇年記念シンポジウムで「徳永直と満洲」として発表させていただき、その記録を同年報告書『孟宗竹に吹く風』（徳永直没後五〇年記念事業期成会発行）に掲載させていただいた。また、それらを基に改稿したものを二〇一〇年『社会文学』31号（日本社会文学会発行、不二出版発売）に発表した。また、今年二〇一二年二月の第35回孟宗竹で、「徳永直論」として、昭和一〇年前後のプロレタリア文学の、宿

敵、日本浪漫派の一員としての神保光太郎を隣において、双方の「朝鮮」作家張赫宙との関わりを探ってみた。そのことについては、未だ成稿の段階にないので、今回はその一部を覚書風に以下書かせて頂く。

植民地「朝鮮」文学作家湯浅克衛は、中島敦の「朝鮮」京城中学時代の学友で、中島敦は、その「朝鮮」体験を深化発展させることをしなかったが、湯浅は、「朝鮮」を、その文学上のライフ・ワークにした。その湯浅の文壇登場作が日本人少年と「朝鮮」少女の友情に絡めて日本の植民地政策を批判した問題小説「カンナニ」である。

「カンナニ」という作品名が日本文壇上に表れるのは、一九三二（昭和八）年十一月の雑誌『改造』誌上である。「第七回懸賞創作当選発表」において「選外佳作」として「小説カンナニ 湯浅克衛」とある。この時1等当選作はなく、2等当選作として「小説半生 大谷藤子」「小説油麻藤の花 酒井龍輔」とある。佳作二五名の中には、湯浅のほか、後に昭和一〇（一九三五）年第1回芥川賞を受賞する「小説蒼氓 石川達三」なども含まれていた。この時の改造編集部を選考経過に「本年度作品に顕著なる一般的傾向はプロレタリア作品と覚しきものが影を潜め、その代わりに救いのないプチブル生活の苦悶と動揺を描いた傾向のものが多かった」とあり、プロレタリア文学陣営にとつて、敵しい時代であった事を物語っている。続いて「一体に何れも現実的な素材の有つ興味よりも寧ろ、作品の文学的価値付けの方向に一歩を進めつつある感じはあるが、而も我々が常に期待して歇まぬ逞しき野生の情熱に溢れた作品や規模構想等に於て画期的発展を思はしむるもの生れ出でなかつたのは、一抹の寂寥を感じしめるものがある」と述べ、「尚佳作のうちに教編は捨て難きものがあつたが、特に『カンナニ』の如きは発表の困難さの為に採り得なかつた」と述べている。これは、暗に、「カンナニ」の「情熱」や「構想的画期的発展」を評価しつつ、時局上の理由で採れなかつたことを述

べている。だとすると、続く文章「投稿家諸君は、発表の可能性についても十分に注意されたい」との忠告は、矛盾である。評価しながら載せられない苦悩が表明されていると見るべきか？

いづれにしても「カンナニ」の、このような事情でお蔵入りするところを、救つたのが、徳永直であった。湯浅は戦後次のように述べている。

私は独立をのぞむ朝鮮の人たちの心に胸うたれ、泣きながら、処女作としてこの問題（万歳事件―筆者注）を取りあげた。昭和八年といえ、満洲事変もあらかたたづいて、世は滔々として軍国主義のしあげられて行つた頃で、左翼はすべて地下にもぐり、それも最後の大弾圧があつた頃である。プロレタリア文学も余燼をとどめてゐる程度で、転向声明が相次ぎ自嘲に満ちた悲憤の作品が多かつた。朝鮮の四季を背景に、風俗を取り入れて、検閲にもだいが注意したのだが、やむにやまれない気持ちで一氣に書き上げた。（略）堀田昇一君の紹介で、「文学評論」にのっけてもらうために、徳永直氏のところにもつて行つた。「これで、カンナニの嫁入り先もきまつたね」

世田谷豪徳寺の徳永氏の家を出ると、堀田君が笑つた。

「作品解説と思ひ出」（作品集『カンナニ』一九四六年十一月、大日本雄弁会講談社）

そのような経緯で「カンナニ」は『文学評論』一九三五（昭和一〇）年四月号に載つた。

しかしその作品は文中何箇所か削除され、更に後半部全てが削除されたものであつた。『文学評論』掲載の作品末尾には、次のような徳永の断り書きがあつた。

付記、「カンナニ」は、作者から半年余も預かつてゐた作品であつたが、その性質上、却々発表に困難であつた。こんどかくも無惨な

姿で編集者に推薦した次第であるが、尚この後半は「万歳事件」が扱はれてゐる。「カンナニ」の作者は後半を別に構図を改めて書くと思つてゐるから、またいづれ読者の眼に触れる機会があると思ふ。一言作者及び読者へのお断りを兼ねて―徳永直

『文学評論』は、「ナルプ解体声明の『合法的発表機関を中心とする創作グループとしての活動にうつれ、そのことこそ、新たなる情勢に於ける更に前進的な文学運動の再組織に基礎を与えるものである』という方針に添う旧プロレタリア文学者たちのそれなりの努力を反映しており、それだけ依拠すべき運動組織がなくなったのちのそれぞれの文学者の拠点ともなったものだったといえる」（佐藤勝）²。雑誌で「徳永直や渡辺順三らが左翼系出版社であるナウカ社に働きかけたことよつて実現した」（同前）ものだとされており、実際、自叙伝「歩いてきた道」連載、「小説勉強」連載、長編小説「黎明期」連載など、徳永の執筆の多さから言つても徳永が中心的作家だといふことができる。その『文学評論』は、積極的に植民地文学作品を掲載しており、たとえば、第1巻8号昭和九（一九三四）年一〇月に台湾作家の楊達「新聞配達夫」を載せ、第2巻1号昭和一〇年一月には同じく台湾作家呂赫若「牛車」、他にも「朝鮮」作家李兆鳴の「初陣」（昭和一〇年五月）や、中国詩人雷石楡の詩（同前）、「朝鮮」の李朝民（昭和一〇年六月）、湯浅の随筆「元山の夏」（昭和一〇年七月）、「朝鮮」の朴 勝極（昭和十一年一月）、同じく金龍濟（昭和十一年五月）、中国の魯迅（昭和十一年七月）その他の名前が見える。これらの植民地文学作家すべてが徳永の紹介とは言えないが、少なくとも、徳永は、他の『文学評論』関係者、渡辺順三、林房雄、武田麟太郎、森山啓、亀井勝一郎らと同じく、植民地文学にかなり強い関心を持つていたとは言えるだろう。

さて、そのような徳永の植民地文学への言及は、同じ『文学評論』上

で、いわゆる「カンナニ」登場前年の一九三四（昭和九）年一〇月に、懸賞小説入選作（第二席）台湾作家楊達「新聞配達夫」への選評がある。

「新聞配達夫」は、台湾人青年楊一家が、内地の製糖会社のために土地を取られ、父が死亡し、楊は上京する。東京で、新聞配達夫募集の張り紙につられて、販売店に飛び込んだが、その待遇はひどく、二〇日間働いたところで、体よく追い出された。その頃、故郷の弟妹は貧乏の爲亡くなり、病身の母も自殺してしまふ。そして楊は、故郷の窮状を救うためにも、新聞配達夫仲間のストライキに加わることを決意する、という内容である。

徳永は選評でこの小説を次のように評価した。

この小説は、決して上手でない。むしろまだ小説にはなつてゐないが、それにも拘らず、非常にひきつける力をもつてゐる。アメリカ資本主義が、インディアンを征服した当時の血なまぐさい匂ひがここでもハッキリわかる。

しかし、この小説が大衆のものとなるには、もつとたかい意味での芸術化、形象化がなされなければならぬのでなからうか。

「アメリカ資本主義云々」は、この小説に書き込まれている、台湾での内地製糖会社の土地取得の暴力的凄まじさの描写の事である。楊の父は反対したためにひどい拷問を受けそれがもとで死んでしまうことになり、一家心中する他の家族のことも書かれてある。

選考にあつた他の選者も、完成度はいまひとつだが「非常にひきつける力」があると何れも同工異曲の評価であつた。中條百合子は「この位真情にあふれたのはなかつた」、武田麟太郎「全体に主観が幼稚であるが、それだけ素直ないい面が前に押し出されてゐ、他の多くの応募作品に見るが如き甚だしく悪達者なスレタ点がないので、好感も持たれるし、訴へかけられる度合も大きい」、亀井勝一郎「やむをえなくなつて書いた

といふ直情がにじみ出てをります、藤森成吉「見すこすべからざる事実とそれを裏づける情意の強み、形象化の不足の弱み」、窪川稲子「作者のひたむきなものが読者にせまつてくる。新聞屋の生活、郷里物語りに心を引かれた」とある。

ここで、「高い意味での芸術化、形象化」について、確かに日本語としての表現に未熟な面が見られ、また、登場人物の像が、ぶれている（特に母の像の前半と後半の齟齬）面もあり、そういう点で形象化には、研鑽が必要と感ぜられるが、「高い意味での芸術化」とは、何を意味しているのか、不明である。ここは、社会主義リアリズム論とのかかわりなどこの時期の徳永の芸術観の吟味が必要だが、後日を期したい。

さて、これまで日本の植民地文学作家湯浅克衛と植民地台湾文学台湾人作家楊遠を取り上げたが、次に植民地朝鮮文学朝鮮人作家張赫宙を取り上げる。

徳永は雑誌『行動』一九三四（昭和九）年十二月号に「プロレタリア文壇の人々」を寄せている。

ところで、この文章に、先述した『文学評論』関係文学者についての興味深いコメントがある。

徳永は「現在、プロレタリア文壇全体のうちで、もつともハッキリした理論的対立は、森山啓対亀井勝一郎であるが、そしてこの前者の所論である『社会主義的リアリズムの確立』と、後者の『プロレタリア文学』とか、ブルジョア文学とかいふ区別など撤去しても差し支えない」といふ所論とは、決定的に対立する」と述べ、亀井に関して「私の『改造』に発表した『芸術至上主義的傾向に關へ』に対して、激しい抗議の手紙を幾本も送つてよこした」と述べている。先の「新聞配達夫」選評からわずか二カ月後のこの言及は、当時のプロレタリア文学陣営の複雑な動きを表している。林房雄に対しては、林の出版記念会での「日本ロマン派

万歳」を取り上げ「彼は往々にしてプロレタリア作家でなくなる。林房雄といふ作家は、私の眼先でしょッちう、チラチラうごいて、ときどきはまつたく見失ふことがある」と、かなりの違和感を表明している。林房雄とともに『文学界』に拠っている武田麟太郎に対して「彼の今日の諸作品からプロレタリア的要素を発見することは、他の同伴者の要素をもつたブルジョア作家の場合よりも遙かに困難である」と、もはや「共通」の地盤にないかのように述べている。

そのような中で張赫宙について、次のように述べた。

彼の最近の作品もいろいろな意味で面白いが、初期に書いてゐた傾向が大事だし、朝鮮を代表する作家として、もしジャアナリズムに引きずられぬ心掛けが必要ではなからうか。（略）台湾から楊遠といふ若い人が出た。この人は作家としてはまだ君に及ぶまい、しかし非常にガツチリした気魄をもつてゐる。（略）君にとつて素晴らしい競争相手ではないか。

張赫宙は、一九三二（昭和七）年四月、『改造』の懸賞小説入選作「餓鬼道」で日本文壇に登場した。

「餓鬼道」は、朝鮮を舞台に、ダム工事に駆り出された朝鮮人農民たちが、過酷な労働と安すぎる労賃の下で喘ぎ、餓えた家族は草の根採りで崖から落ちて死んだりする。そのような中で、組合運動の知識のある若者と英雄的な正義感の農民を中心にして闘争に立ちあがる姿が描かれている。また、同年六月の『改造』掲載作「追はれる人々」は、朝鮮の地主と、朝鮮に進出した日本の会社の為に土地を取り上げられ、満洲に流亡していく朝鮮の農民の姿が、恋人同士が引き裂かれていく描写を交えて、描かれている。また「山霊」（初出不明、一九三四年六月『権といふ男』所収）は、急速な近代化によって山の焼畑農である「火田民」に落ちぶれて行く悲惨な一家の滅亡が描かれている。

これらの「初期」の作品は、階級意識に目覚めた労働者の立ち上がる姿や、近代資本主義の植民地支配の様を描いていて、徳永の評価した「初期」に書いてゐた傾向」とは、このような、いわば社会主義リアリズム的な傾向のことだと推測される。

この後一九三四（昭和九）年頃になると「権といふ男」（『改造』一九三三年十二月）「ガルボウ」（『文芸』一九三四年三月）「劣情漢」（『行動』一九三四年六月）「十六夜に」（『文芸』一九三四年十一月）などが書かれる。

「権といふ男」は、朝鮮の青年田舎教師として赴任した「私」が、村の「学務委員」や「面長」、同僚教師の生臭い権力争い、特に学務委員の怪物ぶりが描かれている。「ガルボウ」も、朝鮮の田舎が舞台で、「淫売婦（ガルボウ）」や他の女をめぐる「金億満」という「面長」と雑貨店主の「私」と面長の恋敵男などとの色慾、金銭欲のどろどろが描かれている。

「劣情漢」は、極めて吝嗇な銀行員の主人公が妻の不倫を疑い、右往左往し、最後は妻を信じようと思いを变える物語であり、「十六夜に」は、故郷の叔父の再婚話に絡めて、新時代の若者である「私」の結婚観が、封建的な結婚観や家柄観に阻まれてしまう話である。これらは、何れも「私」が登場し、朝鮮の封建性の描写が主眼になっている。徳永の評「ジャアナリズムに引きずられ」というのは、封建的な植民地への、「新奇なものへの興味」の事であろうか。確かに、それらは社会革命への志向よりも、欲望の人間像の描写がより浮き上がっていると感ぜられる。一方初期のいわば社会主義的小説は図式的でどこか無理のある生硬なものである印象が否めない。欲望の人間の現実や、「私」のていつを一度はくぐる必要があるとも言えるのである。

このような徳永の意見に対して、張赫宙は、すぐさま「私に待望する人々へ―徳永直氏に送る手紙―」（『行動』一九三五年二月）を書き、次

のように応じた。

私は事実、鉄の如き頑丈な人間ではないかも知れません。どのやうな迫害や拘束がふつて来ようとプロレタリア作品ばかりをかいてゐて、朝鮮の被圧民族としての気概をもつてゐるやうな（貴兄らが望む如き）人間ではないのは不幸（？）にして事実です。（略）私は決して朝鮮を代表した作家だとは思つてゐないのです。私は単に張赫宙一個人としての作家になりたいと思つてゐます。（略）私が朝鮮人だから特に果敢に行動し、植民地人だから特にあばれ廻れとはちと過分な注文ではないでせうか。（略）張赫宙をなぜ当たり前の、一人の作家だとはみないですか。朝鮮人だから、といふ眼でみることは侮辱ではないですか。（略）作家としての私は自分の個性を殺したくはないのです。私は私としての芸術感（ママ）感つてものがあります。

張赫宙は、徳永の「ジャアナリズムに引きずられ」に反発し、また「楊達」との「植民地」作家としての比較にも不満を持った。張は先述したように「餓鬼道」が一九三二年四月『改造』懸賞小説に入選以来、一九三五年二月まで、掲載誌が分かっている限りでも「迫田農場」（『文学クオタリイ』一九三二年六月）「追はれる人々」、「兄の脚を截る男」（『文芸首都』一九三三年五月）「奮ひ立つ者」（『文芸首都』一九三三年九月発禁）、「権といふ男」、「女房」（『文芸首都』一九三四年一月）、「ガルボウ」、「山犬」（『文芸首都』一九三四年五月）、「劣情漢」、「或る兄弟」（『児童』一九三四年八月）「葬式の夜の出来事」（『文芸』一九三四年八月）「十六夜に」、「壘と肉」（『児童』一九三四年十一月〜一九三五年三月）、「一日」（『改造』一九三五年一月）と、三年間に十五作も発表し、その間には、一九三四年六月単行本『権といふ男』を改造社から「文藝復興叢書」の一冊として刊行し、二冊目の『仁王洞時代』（河出書房、一九三五年六月）

を準備中であつた。いわば売れっ子の作家になつており、それなりのプライドがあつたわけである。更に発禁になつた作品もあつたのである。

以上のことから、矢継ぎ早の作品発表に徳永が危惧と反感を持ったことが推測されるが、張の反論にも無視できない面もあり、徳永の「植民地作家」に対する同情と「差別」意識が焙り出されていると言つてもよいだろう。

この後、張赫宙は時局に抵抗の姿勢を見せながらも一九四四（昭和十九）年「岩本志願兵」のような時局向けの作品を書いたりして苦悩の道行きを歩むが、徳永も、この後、一九三七（昭和十二）年「太陽のない街」絶版宣言や一九三九（昭和十四）年の『先遣隊』など、やはり苦悩の戦時下になる。

注

- 1 『湯浅克衛植民地小説集カナンニ』池田浩士編、一九九五年三月、インパクト出版会、所収
- 2 『日本近代文学大事典』講談社一九七七年
- 3 『植民地期朝鮮の作家と日本』白川豊（大学教育出版・一九九五年）を参照した

（佐賀大学教授）

小説『冬枯れ』の登場人物について

梶原定義

一九五〇年代の一時期、私はある小さな印刷工場で働いたことがある。そこにはたたき上げのベテラン文選工や植字工が数人働いていて、仕事が生かされたあとなどには私はちよいちよこれらの先輩たちに近くの酒屋

の店先で焼酎のカクウチにつきあわされた。ピーナツを肴にちびちび焼酎をなめながら彼らは戦前の熊本の印刷工場の様子や労働者のたたかいを熱っぽく語つた。そのなかにかんりの年配で細身のからだの西村という人がいた。この人が徳永の小説『黎明期』の中に「文選工の西村」と言う実名で登場する人物のモデルであつた。また植字工の田川という人もいたが、この人は徳永に深く傾倒して戦前、文学サークルなどで小説を発表していたという。いずれも徳永とともに過ごした人々であつた。この印刷工場で先輩たちと過ごした経験は「徳永直の会」の読書会で彼の小説を鑑賞するうえで大変役に立つた。

ところで、私はしばらく前から治安維持法犠牲者の復権運動のしごとにかかわつてきた。それらの犠牲者の名簿を整理するかたわら、私は戦前熊本最大の労働争議と言われる熊本市電争議（一九二六年二月）の中心人物・永村徳次郎のことを小さな冊子にまとめたことがある。その取材の中で出会つたのが小説『冬枯れ』であつた。

この小説の主人公鷲尾が「……三・一五の被告で娑婆に出たときは狂人であつたもと電車車掌N……」と出会う場面があるが、私はこのNのモデルは永村徳次郎に違いないと思ひ、冊子の冒頭に『冬枯れ』の一部分を引用させてもらった。

一方、永村の出生などを調べるなかで、私は私のもとの職場（戦前働いた職場）の同僚に永村の甥に当たる人物がいることを発見した。私は早速その元同僚に電話した。彼はいまだ別姓のAを名乗っているが間違ひなく一緒に仕事をした仲間であつた。彼は「徳次郎は私の叔父である。君が書いたとおりだ」と言つた。そしてその彼が管理しているA家の墓に永村も眠っていると教えてくれた。

その後、多くの賛同者のご協力があつて永村の顕彰碑がA家の墓地の端に建てられた。しかしA君は数年前に亡くなった。

昨年、永村の命日に当たる十一月に碑前のあつまりを開いた際、福岡県に住んでいるYという永村の姪に当たつた方から私に電話があった。碑前のあつまりには体調の都合で出席できぬと言う断りとともに意外なことを知らされた。『冬枯れ』のなかで狂人になったNの背中を押して家に入った、六歳くらいの女の子「は美は自分であると言うのである。」

新しい発見である。若干の会話のあと私は丁寧にお礼を言つて電話をきつた。いまでは孫達に囲まれてのんびり過ごしているといわれるY子さんは、随分と時が経つたとはいえ、若くして亡くなつた叔父徳次郎の命日をどんな思いで過ごされたらうか。しばらく私はそんな思いにふけた。

ところでこの作品に登場する人物のモデルらしい人が私の調べた中にほかにも幾人かいる。だが、Nを含めてそれらの人々と主人公鷺尾との接触や人物のあつかいに事実とはかなり食い違つているところがあるように思える。

たとえば『冬枯れ』の主人公がNと出会うところはこうなっている。「……しまりのない顎のあたり、三年前きたとき見掛けたよりは……」云々と。

この小説が書かれたのは昭和九年。三年前といえは昭和六年ごろ。その頃永村は諫早刑務所に入つてた（出所は昭和八年）。だから主人公はNに会えるはずがない。また、私が元同僚A君をはじめ永村の生前、つまり刑務所から出てきてから亡くなるころまでを知る数人の取材で得た印象では「……百舌鳥のような奇声を発する……」ようなことはなく静かに永村家を中心とする地域をブツブツ言いながら竹箒で掃いて廻るといふ奇行があつたものの、それは随分おとなしい姿だつたようである。しかし『冬枯れ』はあくまで小説である。気にはなるが事実関係をあれこれほじくることはほとんど意味のないことかも知れない。それを云々

するのは別のジャンルの仕事だろうから。

それにしてもこの小説が書かれた頃の日本経済は世界的大恐慌からまだ立ち直つておらず、人々の暮らしはどん底にあつてメシが食えずに行き倒れが出るほどであつた。他方、稀代の悪法といわれる治安維持法が人々の息を潜めさせ、心ある人々は特高警察に監視され、軍靴の音がいよいよ激しくなつてきた頃であつた。そういう時代に息を潜めながらも時代に抗おうとする人々の姿は私の胸を打つ。だから私はこの小説が好きである。

月)

(二〇一一年五月)

徳永文学を読みながら

廣島 正

私は「会報」の前号で『太陽のない街』を私がどのように読んだかについて若干ながら紹介した。そこでは私が経験した七〇年代の労働運動の雰囲気と似ているものがあると書いている。それは間違いないのだが、今日、『太陽のない街』が書かれた時代や七〇年代という四〇数年前とは、社会構造が根本的に変化しているということを、改めて警鐘を鳴らすつもりで書いてみたい。

少子高齢化

我々第一次ベビーブームで構成された「団塊の世代」は、次第に集団定年の時を迎えようとしている。この世代以上のいわゆる高齢者は、食料事情の改善や医療技術などによつて、およそ長命を保つであろうことは確かであるし、死亡率の低下は喜ばしいものである。

問題は、少子化による人口の減少である。現在の出生率が続くとすれ

ば、今から四〇年後の二〇五五年頃には約九〇〇万人に、七〇年後の二〇八五年頃には六〇〇〇万人以下に総人口がなつてしまふと予測されている。現在の総人口が約一億二八〇〇万人だから、七〇%、四七%になるということだ。しかも、第一次ベビーブームの世代がこの世を去り、第二次ベビーブームの世代が八〇歳を迎える二〇五五年頃、二〇歳から六四歳までの労働人口は約四三〇〇万人となる。ちなみに二〇〇五年の実績で言えば、七七八三万人の労働人口があつたのである。

厚生労働省(旧厚生省)は、この少子化傾向に早くから気づいていた。一九六六年版の『厚生白書』では、出生率の著しい低下と死亡率の低下が「わが国は人口の老化傾向を速めつつある」と指摘していたし、一九七〇年版ではすでに減少化傾向が現れていると書いている。しかし、なら有効な施策はとつてこなかつた。いやむしろ子どもを安心して生育する環境を破壊してきたのが実態である。

生活できぬ非正規労働者

小泉内閣によつて労働者派遣法が改悪されて以来、非正規労働者が大量に生み出された。一九八五年と比較してみても、現在、その数は二倍以上になつている。その内、パートが四八%あまりを占め、アルバイトや契約社員・嘱託がそれぞれ二〇%程度、派遣社員が六%程度である。二〇〇七年、常雇正規労働者が六四・五%であるのに対し、常雇非正規労働者は二二%、臨時非正規労働者は一三・五%となつている。それは、一九八七年と比較すれば、正規労働者が八〇%に減少し、常雇非正規労働者が三二〇%に、臨時非正規労働者が一〇六%に増加しているのである。非正規労働者の割合はこの一〇年、すべての年齢層において上昇しているが、特に一五歳から二四歳の層において一九九〇年代半ばから二〇〇〇年代初めにかけて大きく上昇した。つまり、正規の就職が出来ず、非正規労働者となる若年層が大量に生み出されているということである。

この結婚適齢期の若年層の非正規労働者は、どの程度の給与を得ているのだろうか。時給ベースではあるが、比較してみよう。二〇〇二～二四歳
Ⅱ 正社員一四二円／派遣労働者一一四二円、二五～二九歳Ⅱ 正社員一七四三元／派遣労働者一二六三元、三〇～三四歳Ⅱ 正社員二〇三四円／派遣労働者一三五八円、三五～三九歳Ⅱ 正社員二三二四円／派遣労働者一三五六円となつている。正社員と派遣労働者の格差はこればかりではない。正社員は五四歳まで給与の上昇が続くの、派遣労働者はおよその水準が六四歳まで続くのである。

最低賃金より少しばかりましな給料では生活するにも不安であるだけでなく、六四歳まで状況が変わらないとしたら、将来に対する設計も出来るわけではない。それが最もよく現れているのは、正規労働者と非正規労働者の有配偶率である。男性の場合、二〇～二四歳Ⅱ 正規労働者一一・二%／非正規労働者四・五%、二五～二九歳Ⅱ 正規労働者三三・一%／非正規労働者一四%、三〇～三四歳Ⅱ 正規労働者五九・三%／非正規労働者二八・五%、三五～三九歳Ⅱ 正規労働者七二・五%／非正規労働者四〇・三%なのである。三〇代後半では正規労働者は約七割の者が結婚しているが、非正規労働者は約四割にとどまつているのである。つまり、非正規労働者は、結婚もできないということを示している。これでは少子化が進むのは、当然ではないか。

明日のために

このように考えてくると、昨今の社会保障と消費税値上げの一体改革論議など、笑い話に過ぎなくなる。急速に少子化が進んでいるのに、また全労働者の三分の一を超える非正規労働者という大量の貧窮者を抱えているのに、依然として国民総生産が数パーセントずつ上昇し続けることを前提とした議論など噴飯ものである。

今、労働組合が取り組まねばならないことは、少々の賃上げや待遇改

善だけでなく、まず非正規労働者をなくすことに力を注ぐべきである。少なくとも労働者派遣法を改悪以前の状態にまで戻し、さらにパートやアルバイトなどの待遇を改善することである。それは、少子化による人口激減を食い止める有効な方法でもある。

社会の構造が変化したとはいえ、「明日のために」闘う労働組合の役割は不変であるし、いよいよその価値を問われているといつてもいいと、徳永文学を読みながら思ったものであった。

徳永直の作品を読んで

中村 茉奈美

私は、徳永直という人物を全く知らなかった。代表作「太陽のない街」すら読んだことがなかった。そんな私が初めて徳永直の作品を読んでみた感想を述べたいと思う。

徳永直は熊本出身ということで、作品中にも熊本市の情景がたびたび描かれているが、それが現在とは全く異なっていておもしろい。徳永の父が荷馬車引きをしていたこともあつてか、荷馬車や肥汲車、百姓などが馬を引いて道を歩いていて、路上が「馬糞で汚れ」ている様子が何度も出てくる。「リヤカーに白米を積んだのや、天秤でつっかけた策に、味噌とか野菜とかを入れた百姓女達、中には赤いネルの腰巻をたらしした娘なども雑じって、毎朝のように群をなして通る。」(「冬枯れ」より)、「荷馬車の多くは肥後平野の特産物、米や麦や粟やを積んで坂を降りてきた。(中略) ふかい轍の痕や、うずたかい馬糞や、千切れた草履やで、坂はいつも汚れているのであった。」(「風」より)などの描写がある。

私は農村の出身だが、今では農作業はほとんど機械化され、移動や輸送も自動車かトラックであり、このように馬が普通に道を歩いていたり、

百姓の女性が天秤を担いでいる光景などは目にしたことがない。また、「太陽のない街」に出てくるような労働争議にも馴染みがなく難解だった。作品中で「〇円〇銭」「〇厘」とお金の単位が出てくるが、現代のお金の価値と全く違っているのでそれがどのくらいの金額であるのか想像しづらい。私にとって徳永直の作品に描かれている題材や情景の描写は、ほとんどが自分自身の経験を通してではなく、今までにドラマや映画などで見た昔の日本の風景、人々の生活の様子などから想像するしかないものであった。

徳永直の作品を読んで驚いたことは、登場人物が現在でいえば小中学生の年齢の頃から労働に従事していることである。徳永直自身も小学校に入る前から竹細工、他家の草刈り、御用聞きなどをして家計を助け、父の代わりに荷馬車引きに出たり、こんにやく売りをしたりしており、六年生の途中で小学校を辞めて印刷工場、小新聞社や米屋などで働いていたという。当時ではそれほど珍しくないことだったのかもしれないが、小学校すら休んだり中退して労働しなければならないほどの貧困の実態に衝撃を受けた。

「最初の記憶」には、徳永が小学生のころの思い出が書かれている。貧乏ゆえに幼いころから竹細工職人として働いていたが、それを好奇の目で見られたり学校でからかわれたりしたときの恥ずかしさや屈辱感などが伝わってくる。「八年制」の中の、鷲尾和吉の「今日、貧しいか、富んでいるか、ということとは個人的な努力以外の、社会的な宿命とさえないか、というけれど、うけなければならぬ屈辱感、個々のものとしてのしかかってくる！」という言葉は、徳永自身が味わった経験からくるものではないかと思つた。

「最初の記憶」で、徳永の母が「働いて喰うに誰に遠慮が要るもんか」「どんな仕事でも仕事で恥ずかしいことはなか！」と言っていたのが印

象的である。徳永は「私たちはもつと労働について語らなければならぬ。労働のもつ内容は、現在語られている多くの恋愛よりも、インテリゲンチヤのある種の悩みよりも、乃至は消費生活の絢爛さよりも、はるかに豊富で、人類を益するものである。」と言っているが、実際に労働者としての経験があるからこそ、読む人々にリアリティや説得力を与えるのだと思つた。

現在、社会には貧困や格差、過労などさまざまな問題が存在する。見えていないだけで、今も徳永作品のような現実があるのかもしれない。徳永直の作品を読んで、これらの問題について考えるきっかけとなった。

「太陽のない街」での出発から

「日本人サトウ」へ

金野文彦

徳永文学の出發で最大最高の作品が「太陽のない街」であることはいうまでもない。この作品は、歴史の表舞台に登場した労働者とその群像の闘争を描きだした。

この出世作は、徳永文学の「労働と労働者の生活」という柱が貫かれている。同時に、作家徳永直の出發が、戦争と平和という二〇世紀を縦断するテーマをスタートラインともしていることを見せてくれる。

「太陽のない街」と戦争と平和とどこに関係があるのだろうか。作品のスタートは、高等師範学校への「摂政宮」の行啓である。「摂政宮」すなわち、一九二一年に摂政となった皇太子・裕仁のことである。病気がちの大正天皇に代わりその権能を行使することになる。青年摂政は、否応なしに当時の歴史の激流に身を曝すことになったのである。

一九二一年は、「シベリア出兵」の際中である。ロシア革命干渉ばかりでなく、この戦争には、朝鮮・中国の民族独立運動と日本国内の労働・民主主義運動がたちはだかつていた。青年摂政・裕仁は、この歴史の激流をどう眺めていたのだろうか。東京高師から「谷底の街―太陽のない街」見たようにか、それとも欧米流の「平和主義者」としてなのか。

徳永直は同時期、高原半島や熊本で労働運動をし、故郷を追われ東京にやつてきた。新天地・東京で文学的開花をしていく。日本資本主義の中核東京での新たな労働経験や共同印刷争議に加え、大正デモクラシー期の社会主義思想との再会もあった。

徳永における「戦争と平和」の軸は、「インターナショナルリズム」である。それは、東京とは別の方角―「北」からもやつてきた。秋田土崎に生まれた雑誌『種蒔く人』は、それを体現する雑誌であった。徳永にとつて金子洋文らは、「太陽のない街」を生み出す「師」であったのだ。

同時期、働き口を求めて宮城県登米からは、佐藤トシヲ、キヨ、ハルが上京してきた。伊藤政雄と共に彼女たちの立場は、結びついていく徳永直のそれと同じものになっていった。「きょうだい」「日本人サトウ」・佐藤三千夫の存在と闘いによって。

さらに、郵政労働者として東京を歩き回つた首藤直一郎は、当地で失業後「太陽のない街」でプロレタリア文学運動などに参加していった。戦後、もつとも深く「日本人サトウ」を読み込み、顕彰運動によってその続編を書き続けたのである。

同時代人徳永直は、東京高師の丘から見下ろされる「太陽のない街」にいた。その立ち位置は、単なる、谷底の街、ではなかった。日本資本主義の中核東京から地底でつながり、朝鮮・中国・ロシアのユーラシア全域とつながる大地にいたのである。

「太陽のない街」の配置図は、徳永直が戦争と平和について正面から描

くべき人物の配置が表出されている。「妻よねむれ」で表舞台に登場したトシヲなどの女性群や闘う労働者と対抗する財閥。それらを「超越」する摂政・裕仁。これは日本資本主義の中枢東京での「シベリア出兵」の対抗関係の縮図である。

一瞥しただけでも、徳永文学は、「太陽のない街」で出発し「日本人サトウ」へ発展深化し進化したといえる。

(宮城・佐藤三千夫記念会事務局長)

捕物作家納言恭平とプロレタリア精神

永 田 満 徳

納言恭平（評論は本名。奥村五十嵐 以下納言）は明治三三（一九〇〇）年五月十一日、^{註1} 玉名郡小天村（現玉名市天水町）上有所に生まれた。

納言恭平は、昭和時代後半の中央文壇で小説や評論、あるいは文芸誌編集などと大活躍した。作風は海音寺潮五郎や吉川英治らとの親交があり、世にいう大衆文学の面で花開いた。『菊水の旗の下に』や『日東の正義』のような時代小説、『勤皇美少年記』や『~~神~~風連の妻』のような神風連の変や西南戦争を扱った作品、『七之助捕物帖』『森草二郎捕物暦』のような捕物帖などに力量を発揮した。また「蜜柑村の人々」や「果物の郷愁」のような随筆も多く書いている。昭和二四（一九四九）年七月六日、これから捕物帖も佳境に入ろうという、四九歳の若さで、病気で亡くなった。

昭和二三年の『捕物名作五人集』には、

野村胡堂「銭形平次捕物控」／岡本綺堂「半七捕物帳」／納言恭

平「七之助捕物帖」／城 昌幸「若さま侍捕物手帖」／横溝正史
「人形佐七捕物帳」

とあるように、後世名をなす作家たちとともに、名前を刻んでいる。柳山潤が追悼文で、「せめてもう五年、奥村を生かして、捕物帖を書かせたかった。恐らく彼も、野村胡堂の次を行って、大いに売れっ子になったろう」と書いているのは決して大袈裟でないことがわかる。

さて、納言は本名の奥村五十嵐で、文学時評においても健筆を振るっている。世評はあまり芳しくなかった谷崎潤一郎の「盲目物語」を「日本文学最高峰の一つだ」とし、よいものはよいとして受け入れられない日本人の狭量さを指摘している。今日、「盲目物語」が谷崎潤一郎の代表作の一つになっていることから、納言の批評眼の鋭さを表している。

納言は創作者であるがゆえに、文学の動向に注意を払い、文学の後退を憂える姿勢が見て取れる。納言の批評批判の矛先は特に純文学に向けられている。納言は大衆文学の振興の立場に立ち、純文学に比してはるかに社会性を持つ大衆文学に対する批評の少ないからである。そういう思いも手伝って、納言の批評の文章は納言なりに大衆文学批評を担っている気概に満ちている。

純文学と探偵小説とを比較して、ともにインテリ階層、ここでは教師、弁護士、医者や進歩的な役員、会社員たちを読者に持ちながら、純文学は狭い個人的趣味に埋没したために読者を失い、大衆文学に席を譲ることになったという。

それでは、どのようにしたら文学をインテリ階層に取りもどせるのか。納言は、それはリアリズム運動であると明言する。現代の読者は、小説の世界に自分の現実をみようとするからである。個人を描いたドストエフスキー的、バルザック的リアリズムとは異なる、集団を描くことである。そのためには、豊富な人生経験と、プロレタリア精神を獲得しなけ

ればならないと主張している。

このような主張は、昭和初年代の近代リアリズム論争の中において、リアリズム精神とプロレタリア精神を同一視している点で、納言の文学批評の特異さがある。^{注1}

いずれにしても、納言は当時の文学世界に真摯に向かい合いながら、大衆文学に軸足を置いて、公平な批評を行ったことは忘れてはならない。

注1 五月二〇日の「納言恭平展記念講演会」のパネルトーク（以下、パネルトーク）において、「本展では、生年時の小天村戸籍による五月十一日を納言恭平（奥村五十嵐）生年月日とすることを、奥村氏、講師、パネラー総意のもと、訂正告知する」と宣言した。パネルトークの参加者は奥村弘文氏（納言氏長男）、古江研也氏、中村青史氏、永田満徳、森下修氏である。

注2 平成二四年四月二一日から七月一日にかけて開催された「捕物作家納言恭平展」のパネル製作に携わった古江研也氏は、納言の昭和四（一九二九）年七月三〇日の日記に触れて、「ゴリキーやブハリン『史的唯物論』を読み、短編『馬車小屋とマルクス青年』を書きかけていた納言は『自分はマルキストにはなれないのではないかと思ふ』と記す。その後の日記には、『新青年』の探偵小説やコナン Doyle を読んだことが綴られていて、入院生活中に小説家としての方向転換があったことが窺える」と説明している。パネルトークに参加された奥村弘文氏は、父が特高らしい人物に附けられていたという由の発言があった。これらのことから、納言は当時のプロレタリアの存在に興味を持ち、マルクス主義に惹かれていたことは間違いない。この文学時評の主張はこの時期になされていたのではないかと推測される。

（徳永直の会会報担当）

宮城・登米町 佐藤三千夫記念会

メッセージ

昨年三月十一日は、人類が常に「天災」に曝されていることを改めて実感させました。

しかし、原発事故は「天災」と混同することはできません、核時代に直面した徳永直は、なによりも核の最悪の利用である核兵器に強く反対しました。

この「天災」と人災に、直はどのような目を向け文筆をふるったでありましょうか。「天災」に苦しむ人々への愛情にあふれる文章を創りだし、人災を誤魔化そうとする輩へするどい批判を行ったことでしょう。

直と共にあった宮城・東北は、全国からの支援を受けつつも、底力で再生をすべしでありましょう。

熊本・孟宗忌と共にある宮城・登米の佐藤三千夫記念会から。

二〇一二年二月十二日



第31回「吞牛忌」



佐藤三千夫記念碑にて

徳永直文学散歩⑤

緒方 宏 章

『他人の中』

十六の春、米屋の小僧になった。――

私はそれまで、三年ばかり印刷工場などではたらいていたが、眼をわるくして勤まらなくなった。私は米屋の小僧を好きではなかったが、母が云った。

「他人の飯も喰ってみんことには、一人前にならない。力仕事すれば身体も強くなるうし、眼もそのうちには癒えるだろう」

それに逆らうことは、私は勿論、そう云っている母自身でさえが出来ないことだった。瘦馬を相手に荷馬車をひっぱって、八人の子供を育てている父の苦しい稼ぎに、長男である私が、眼が悪いからぐらいで遊んでいる訳にはゆかないからだ。それに私の家でも、村の貧乏な他の家と同様に、米屋に「借り」があった。

米や味噌など、現物で借りのものもあるし、金で借りのものもある。合計すれば三十円に満たない金額であるが、増えたり減ったりして、もう何十年もつづいていよう。（徳永直文学選集）による）

直が幼少期を過ごした黒髪界限には、今でも昔ながらの佇まいが残っている。



住居跡から若宮米店方面を望む



朗読



講演

第三十五回 孟宗忌

日時 平成二十四年二月十二日（日）

①午前11時～午前11時半 徳永直文学碑 前

（立田山登山口、泰勝寺入口）

・ 献酒、献花。経過報告。

②午後2時半～午後4時半 熊本大学法文学棟会議室

・ 朗読 「ある特派員」

・ 講演 講師・浦田義和氏（佐賀大学教授）

③午後5時半～午後7時半 懇親会



2012年（平成24年）度 徳永直の会 総会

1. 期 日 : 2012年 5月19日（土） 午後2時半受付～
2. 会 場 : 崇城大学市民ホール 中会議室
熊本市桜町1番3号
3. 講 演 : 午後3時～午後3時30分
演題・・・『先遣隊』の背景について
講師・・・高木 陽助（徳永直の会会長）
4. 議 題 : 3時30分～5時
 - 1) 会長挨拶
 - 2) 2011年度 事業報告
 - 3) 2011年度 会計報告
 - 4) 2012年度 役員案について
 - 5) 2012年度 事業計画案について
 - 6) 2012年度 予算案について
 - 7) そのほか事業予定
5. 閉 会

2011年度 決算報告

収 入		支 出	
繰越金	149,577	事務関連費	17,426
会費	73,000	通信関連費	23,600
利子	21	総会関連費	10,211
寄付	25,000	碑前祭関連費	32,917
(金野氏、高木氏、 熊本県高等学校 国語教育研究会)		会報関連費	25,200
		くまもと文化振興会関連費	
		25,000	
		HP関連費	4,085
合計	247,598	合計	138,439
積立金	100,000	繰越金	109,159

上記の通り相違ありません。

平成24年5月15日

会計 荒木 恵

2012年度 予 算 案

収 入		支 出	
繰越金	109,159	事務関連費	15,000
会費	80,000	通信関連費	20,000
雑収入	21	総会関連費	10,000
		碑前祭関連費	20,000
		会報関連費	50,000
		読書感想文関連費	10,000
		くまもと文化振興会年会費	
		20,000	
		HP関連費	5,000
合計	189,180	積み立て金	30,000
積立金	100,000	合計	189,180



編集後記

・昨年末、会報五十九号を編集しながら、六十号は記念の特集号を組もうということになった。そこで、孟宗忌の折りなどに寄稿を呼びかけると共に、何名かの方々には直接ご寄稿をお願いした。

・六月の初め、印刷費を心配するほどの沢山の玉稿が届いた。嬉しい悲鳴である。忙しい中に玉稿をお寄せいただいた中村先生、木村先生等々の方々に、心から感謝申し上げます。

・特にエヴァリン・ルシーニュルオドリさんの、フランス語版『太陽のない街』の復刻版へ新たに付された解説を、立命館大博士課程の和田さんが日本語訳したものを載せることができた。『太陽のない街』をフランスの人びとがどのように受け取るのか、垣間見たようで興味深い。和田さんのご苦勞に敬服する。

会員募集

会員を募集しています。お知り合いの方に、入会のお誘いをお願いします。また会員募集のためのアイデアがありましたら、お寄せください。

インターネットでアップ

インターネットで徳永直の会を開設し、会報（一号～三〇号まで）をアップしています。